マダケ、ハチクは日本の原産

室　井　　綽

動物や植物の名というものは、我々の祖先が永い永い間、それぞれ優れた観察眼によつて、その生物固有の特徴を見抜いて付け、それをまた多勢の力によつて、あるいは短縮され、時には語呂をよくするためにしばしば転尾して、何か迫り来る興論のようにして生れたものである。その間、暴力とか、遠慮とか、そうした一切を抜きにして、芸術一点張りで知らず知らずの間に築きあげてできたもので、単なる理窟や学問の力では到底おさえきれぬある大きい力がある。それでこそ、植物なり、動物なりの多くの名が何等苦労なしに、大きい愛着を感じながら、いい換えれば、道楽化して物の名を覚えることができるのである。だからこそ、名を聞いただけで、その生物の姿を心に浮べて感じを楽しむということになるのである。

しかし、ひとたび類似の顕著な特徴を有するものに出遇うと、書いた人と読んだ人、いつた人と聞いた人とが、とてつもない方向転換して逆に本家が分家に奪われるようなことがある。ちようど、現代仮名遣いの場合に、いつた人の心と、聞く人の心の間に大きい隔りを起こす場合があるようなものである。

我々の祖先は小竹に対して大きい稈の穴のあるハチク、マダケを古語で中空の竹の意でカラタケと呼んだ。諺に「カラタケを割つたよう」というカラタケ、すなわち、空虚の実質のない竹の意である。それにもかかわらず後の人は中国から漢字の輸入にかこつけてカラタケを音訳して唐竹（カラタケ）だの、漢竹などとしてしまい、おまけに支那からの渡来品だなどと、とんでもないものに結びつけて、涼しそうな顔をして今日に及んだ。幸か不幸か中国にも広く栽培されているから、なお、そう信じたのも無理からぬことである。

それに植物学者間で有力視したと思えることは、同属の一種であるモウソチクが、「今からわずか220年前の元文元年に琉球（？）より渡来し、これより42年後の安永8年に江戸、品川に栽培された。」ことが歴史の上で明瞭に記録されていること、また、ゴサンチクは詳細な渡来は不明であるが、今から250年前の大和本草に初めて記録されたのであるから、おそらく渡来してから300年とはならないであろうことなどから、上の近縁種であるハチク、マダケの渡来説に一層輪をかけたのである。

上のモウソウチクの事実から渡来説が生物学者間の一大思潮となり、渡来植物の権威であつた、さすがの白井光太郎博士も、牧野富太郎博士も、両先生の各種の著書で、他の幾多の植物については渡来年代を明記したのであるが、マダケ、ハチクについては、渡来品と認めながら、渡来年代の見当がつけられなかつたのである。

しからば、渡来を全然肯定しているかというとそうではなく、鴻巣盛広氏の万葉花譜（昭年17年創元社）には、「日本に生育した年代が古いもので、外来植物とみるのは無理ではなかろうか」と結んでいる。

私は過去20年来、竹笹ばかりを追つて日本の諸地方を歩いて得た知識を基に、諸学者の研究も併せ、次の諸点から、マダケ、ハチクが日本の古来からの自生説を主張するものである。

（Ⅰ）　ハチクの葉の化石と考えられるものが知られている。すなわち、スエーデンの化石学者故ナトースト氏によつて長崎県茂木層の洪積期の化石層から出た竹類に、フイリテス　バンブソイデスという名を与えたのである。また、故小泉源一教授も、但馬、信濃などから化石として出る竹をマダケとしている。その結論に「現今日本ではマダケ、ハチクの如きも果して野生品なるや否や判然せず、支那より渡来したものとしてあるが、既に本土及び朝鮮の中新世統より化石として出で、最近は洪積統よりも出づる如く、元来日本の野生品たる事は疑の余地なし。」と結んでいる。（植物分類地理　第11巻 57ページ）

すなわち、化石学上より証明されたこと。

（Ⅱ）　マダケ、ハチクともに変、品種が日本で非常に多くでき、それらがまた日本のみに産し、中国には少ないこと。

かつて、バビロフは栽培植物の発祥地の推定に因子中心説、すなわち、栽培植物の変異の数が最も豊富であること、また他の地方で見られぬ変異もあるなどをあげたのであるがこの条件は、ハチク、マダケの場合、まさしく日本の状態にあてはまるものである。

中国人は竹の斑入りとか、稈の斑紋、節間発育不等、枝垂れなどこうした園芸品をとても根気よく努力して発見保存する人種であるが、その中国に変り種がなく、日本にのみ、どしどし出たということは単に日本に移入されたもののみが変化性に富んでいたとは考えられない。中国原産のウメなども日中の両国に多数の品種があるが、これは種子で容易に殖え、その変異性を発揮する機会（因子の組みかえなどによる）が多

かつたからであろう。しかし、竹は開花の周期が長く、時たま開花しても稔性が極めて低く、種子が殆んどできず、私など開花竹林によく入つて果実を探して歩くのであるが、マダケやハチクの果実を採つたことがないのである。すなわち殆んど無性生殖をくりかえしているのである。万一果実が出来たとしても採りまきにしなければ発芽しない難物である。

(Ⅲ) カビ性斑竹のあること。すなわち、日本にはマダケやハチクの稈の表面に寄生する特異なカビが発見されていること、そしてこの日本を起原とする寄生菌と宿主との関係が成立するためには長年月を要することから、日本におけるマダケやハチクの起原が他のどの土地よりも古いことを示すと考えてよいと思う。いずれも菌は他に移すと決して繁殖せず、したがつて、竹は普通のマダケやハチクになつてしまう。例えば

A. ヒユウガハンチク（日向斑竹）は宮崎県西諸県郡高原村他、2カ村に生ずるが、他の土地に移植すると菌は繁殖せず、したがつて斑をつくらず単なるマダケになつてしまう。この斑をつくる菌は、アステリネラ・ヒユウゲンシスである。

B. トサトラフダケ（土佐虎斑竹）は高知県高岡郡新荘村安和に産する斑竹で、世界中で最も美しい稀竹であるが他に移すと斑がでないで単なるマダケになつてしまう。

C. タンバハンチク（丹波斑竹）は京都、兵庫、滋賀の諸県に産するカビによつて紋のできるもので、他の地方に移すと斑がでずハチクになつてしまう。

(Ⅳ) 日本の島々を巡ぐると、瀬戸内海の小島、例えば淡路の東の、かつて要塞地であつた小さい無数の島々にも、マダケ、ハチクがネザサなどの群落中に自生している。裏日本の島にもこうしたものが普遍的に見られる。このような交通不便の無数の島々に誰かが植え歩いたものなどとは、どうしても頷けない。殊にマダケは一層普遍性に富んでいる。

(Ⅴ) 同属の竹の残存種と考えられるものが、島根県比婆山にずつと前からインヨウチク①（陰陽竹）と呼ばれて知られていた。また関西、関東にかけて太平洋岸に点々とヒメハチク②という種類が広く分布していることが最近明らかになつた。ハチクに似ているがいくら手入が能くても稈が肥大しない。花屋で盆栽にして売出すのであるが、他の竹では枝先が太くて見苦しいが本種は盆栽にして一番よく竹らしい姿をしている。両種とも日本の特産種である。私はこれを残存種とみたい。

(Ⅵ) 日本の三大有用竹であるマダケ、ハチク、モウソウチクの古来の必要性から考えて見ると、モウソウチクの筍は大きくて美味で、稈も太くて強く竹類中では他に競争者がないことで群を抜いて一位に推されるものであろう。それに反してマダクのような筍の苦い食えもしないものをわざわざ大昔に不備な舟で、種子のできない図体の大きい株を命に代えてまで遠方の中国から入れよう筈が無いではないか。このような大昔にもし、ハチク、マダケ、モウソウチクを渡来したとすると、先ずモウソウチクが入れられるべきであると考えるのが至当である。それにもかかわらずモウソウチクは徳川末期に入つたことは、マダケ、ハチクが固来から自生していたことを間接に物語るものと思われる。

(Ⅶ) 名義のことであるがカラタケは大竹、または空竹（中空の竹）の意であつて中国渡来の意ではなく、単に同音であることである。太古には土民が竹の皮をとつて食器代用として重宝がつたものである。マダケとは真竹（マタクダケ）の中略であろうし、一名カワタケ、すなわち皮竹と呼ばれたことから推して、竹の皮の重視されたことから起つた名である。同様に、ハチクすなわち淡竹もシロタケ、またはアワタケと呼ばれたのもマダケの竹の皮に比べて黒点がないので名としたものである。こうした古い名からしても食べるものとしての竹よりも、食器としての竹で貴ばれたと見ることができる。

今の学者はマダケは竹材として王であるとの見解で真竹としているが、未開土民の刃物さえない時代の生活から生れた名義としては程遠いものと思われ、どうしても頷けない解である。

(Ⅷ) 歴史上にもしばしば記録が残つていること、竹の開花は全竹林が一度に開花枯死するので昔から相当関心が高く、したがつて正確に記録されたものが残つている。代表的なものを拾つてみると、今から1145年も前の日本紀略（弘仁4年）に「天下の呉竹（室井云、ハチク、マダケの総称）ことごとく枯れる」や、1027年前の扶桑略記に「朱雀天皇の承平元年に呉竹枯死す」など明らかに記録されている。

(Ⅸ) 神話を材料として動植物の存在を証拠だてようとすることは慎むべきことではあるが竹に関する伝説は古くから沢山にある。

上のような多数の事項からして、マダケ、ハチクは日本在来のもの、すなわち、天生品と断定することが適当である。

① Phyllostachys tranquillans (Koidz.) Muroi
② Phyllostachys humilis Muroi